

美術教育におけるクロッキー指導に関する一考察

桶田 洋明〔鹿児島大学教育学部(美術教育)〕・曾我部 洋子〔鹿児島大学大学院教育学研究科〕
松下 茉莉香〔鹿児島大学大学院教育学研究科〕

A Study of Teaching Method Croquis in Art Education

OKEDA Hiroaki · SOGABE Yoko · MATSUSHITA Marika

キーワード：クロッキー、スケッチ、美術教育、描画技法、絵画

I. はじめに

絵画分野におけるクロッキーの役割は、対象を正確に描き写すだけではなく、線描を中心とした最もシンプルな表現方法のひとつ故に平面表現の根幹を担っているといえる。しかし、今日の美術表現に見られる多種多様な表現方法により、クロッキーのような基礎的表現手段の役割がやや小さくなってきた感がある。

学校現場においても、多様な表現方法を基にした授業が大勢を占めており、授業時数の減少という現実も伴って、ますます基礎的表現分野の扱いが減少している。

そこで本研究では、学校現場や教科書、技法書におけるクロッキーの扱いについて検証し、より具体的なクロッキーにおける指導法の一例を導き出し、授業実践を含めて考察をしていくこととする。次章ではまずクロッキーの定義や種類を含めてクロッキーを行うことの意義について考察していく。

II. クロッキー教育の意義

1. クロッキーの定義とその役割

クロッキーは、絵画における基礎的な能力を身につけるために行われる。では、クロッキーとは具体的にどのようなことをするのであろうか。ある文献によると「短時間でする写生。速写。英語のスケッチに相当する語。日本では写生をスケッチ、略画・速写画をクロッキーという⁽¹⁾。」とある。

さらに、他の文献等で調べてみた結果『短時間で描写する』という共通項が見られた。しかし、「スケッチと同義。また、建築、彫刻、絵画、デ

ザインの最初の構想を思うままに描いた素描。いずれも作者にとって直接的なものである⁽²⁾。」と作品のエスキースとして、クロッキーを解釈しているものもある。このことから、制作時間や描写する目的によって、クロッキーは幅広く用いられていることがわかる。このことを表1にまとめている。

表に示した通り、まずクロッキーは最も短時間で行う描写方法のため、瞬時に対象を描写することが求められる。したがって、動物や人体など動いている対象を描写するときに用いることが多い。素早く対象を捉える訓練としても行われる。

次にスケッチとドローイングだが、意味に大きな相違はなく、互いにクロッキーよりは時間をかけて描写される。したがって、陰影や着色を行うなど、クロッキーよりも具体的に対象を記録することが可能である。

そして、より多くの時間をかけて行う描写方法がデッサンである。じっくりと対象を観察する時間があるため、より写実的で正確な描写をすることができる。

以上、これらの描写法に共通して言えることは、ただ上手く描くことが目的なのではなく、対象の本質をしっかりと捉えることの出来る観察力を身につけることが大切なのである。それは、これらの作業を繰り返し行うことで身につけていく。

最後にエスキースについてであるが、これは、例えば油彩画や水彩画の完成作品のための構想、下描きを意味し、時間制限も特でない。エスキースは技術を身につけることが目的というよりも、あくまでも最終作品を描くためのプロセスとして

用いられている。

では、具体的にクロッキーには、どのような描写方法があるのかを、次節で述べていく。

時間	種類	目的	
短	クロッキー (croquis: 仏語) 速写画、略画	対象の基礎 構造、概念、 概観の理解	動きのある被写 体の速写 瞬時に対象を描 写
	スケッチ (sketch: 英語) 写生画、略図		写生、素描
	ドローイング (drawing: 英語) 線描		絵画に対す る基礎的能 力を育む
長	デッサン (dessin: 仏語) 輪郭線による描 写		単色の線や筆触 によって物の 形、明暗等を描 写
	エスキース (esquisse: 仏語) 下絵、下図	完成作品のための下描き、 習作	

表1 クロッキーと類義語との関係

2. クロッキーの種類

クロッキーは前節でも述べたとおり、短時間で描かなければならないため、線だけの描写や簡単な着彩しかする時間はない。

しかし、制限された時間の中でも、描き方を工夫することで対象の特徴を捉え、生き生きとした画面にすることが出来る。また、クロッキーは、用いる道具にも特に決まりはないため、描き方は多種多様で、幅広く存在する。

ここでは、大きく4つに分けて分類してみることにする。しかし、この4つは全く別物ではなく、制作時間の長さによって出来る範囲を広げたものである。

まず1つ目は線のみで描く方法である。これは

最も短時間で、すばやく対象を捉えられる描き方のため、輪郭線による大まかな形態把握や、動いている対象をその場で記録することが可能である。また、線のみで描く場合でも、強弱をつけて画材を対象の特長に合わせて使い分けること(例えば鉛筆からサインペン、墨汁などに変えるなど)で、材質感・立体感を表現することができる。

2つ目は陰影をつけて描く方法である。この方法は、1つ目に挙げた線のみで描く場合よりも時間に余裕がある場合に採られ、より立体感を引き出すことができる。また、陰影をつけることで、どこに光が当たっていて、どこが最も暗いかなど、明暗対比の表現にもなる。ここで気をつけたいことは、時間をかけて陰影を描くデッサンとは目的が異なるため、細部にこだわらず、大きく明暗をつけていくことが大切である。ある文献に、クロッキーの大切な条件の1つとして「(部分を見ながら全体へ、全体を見ながら部分へ)⁽³⁾」という点が挙げられていることから、クロッキーは大きく全体を見る眼力を養うことが求められていることがわかる。

3つ目は中心線など、対象の骨組みを意識して描いていく方法である。これは対象の中身の構造をとらえ、実体に則した、より正確な描写をすることが出来る。この描き方は、1つ目に挙げた輪郭線から描いていく方法と違い、最初に、例えば人物ならば、肩や腰の傾きなど、体を支える基本となる骨組みから描いていく方法である。ここでも、各部分をバラバラに描くのではなく、全体を意識しながら描いていくことが大切になる。また、その骨組みをもとに、それに付随している筋肉などもひとつの塊としてとらえ、細かな部分はあまり気にせずに、大きな動きをとらえていかなければならない。

そして最後が着彩して描く方法である。クロッキーにおける着彩では、ただの塗り絵のようにならないように注意する必要がある。色彩を用いることは、より形態感や立体感を引き出すことが目的であるため、例えば水彩を用いる場合には、固有色を塗っていくというより、絵の具をパレット上で混色しながら紙の白地を生かしつつ、水分の

量を調節しながら描いていくと、立体感・透明感のある魅力的な画面に仕上げることが出来る。しかし、着彩して描くのは難易度が高いため、明度、彩度、色相の幅を調節できるよう繰り返し練習を重ねることが必要である。

このように、クロッキーは、制作時間の長短によってさまざまな肉付けをすることが可能で、作者の目的によって描き方は変わり、描画形態も数多く存在する。

次節では、指導の観点から考察するために、教育現場で用いられている教科書等においてどのようにクロッキーが扱われているかを検証する。

3. 小・中学校でのクロッキー教育の意義と効用

クロッキーは、絵を描くための基礎的能力を養うのに役立つことは既に述べたが、実際に、小・中学校の図画工作、美術の授業において、クロッキーの指導はどのようなかたちで行われているのであろうか。

小学校の図画工作の教科書を見てみると、クロッキーという言葉は見当たらなかったが、大きな範囲でクロッキーに含まれるだろうと考えられる項目がいくつかあった。

まずは小学校3・4年(上)の教科書の「グルグルかくかく⁽⁴⁾」であるが、これは太い線、細い線、まっすぐな線、まがった線を絵の具やサインペンなどで描きながら表現する授業である。直接クロッキーには関係がないようであるが、線を意識させ、強弱をつけて描かせることは、クロッキーにつながっていく授業と言えよう。

また、小学校5・6年(下)の教科書に「色を選んで⁽⁵⁾」がある。これは、色を数多く使わなくても工夫次第で、気持ちを伝える表現が出来ることを学ぶ単元である。クロッキーも、より短時間で描かなければいけない場合には、色材を多く用いることは出来ない。しかし、それでも魅力ある画面にすることは工夫次第で十分可能である。最低限の画材や色材の中に美しさを見出せる目はクロッキーを行う際に大いに役立つ。しかし高学年においては、いわゆるクロッキーの線描的要素を扱った単元は見当たらないのが現状である。

次に、中学校の美術の授業内容になると、本格的に対象を描いていくことになるのだが、中学校1年の最初の段階では、まだ絵を描くことに苦手意識を持つ生徒も少なくないため、まずその苦手意識を少しでも和らげておく必要がある。この観点から、中学校1年次において絵画分野に本格的に入っていく前にスケッチやクロッキーを行うことには意味がある。

実際に、中学校1年の教科書の最初の絵画分野の項目に「スケッチの楽しみ⁽⁶⁾」という単元がある。スケッチを通して対象と向き合うことで、対象の特徴を把握し、そのよさや美しさの発見をすることが目標とされている。これはクロッキーにおいても共通するとても重要な点である。クロッキーやスケッチを繰り返し行うことから、本格的に絵を描いていく際に必要とされる基盤が徐々に形成されてゆく。また、義務教育である小・中学校における絵画教育・美術教育は、児童・生徒の今後の美術に対する関心の度合いに大きく関わってくるため、その重要性は言うまでもないが、なかでも小・中学生が美術に興味を持つかどうかにか大きく影響する、初期に行われるスケッチの授業の占める比重は大きいものがある。小・中学生が過ごす日常の中で、様々な事象について学ぶ際に、スケッチやクロッキーの手法、技法を習得することは、大きな助けとなるであろう。

そのような観点から再度教科書を検証してみると、スケッチやクロッキーの要素を扱った箇所はあるが、そのいずれも技法的な表現方法までは明記されていない。スケッチ、クロッキーというある意味で人間にとって最も重要な能力を養う作業を、より意欲的、発展的に学ぶためにも、特に中学校においてはもう一步踏み込んだ指導があってもいいのではないかと推測する。

そこで第3章では、実際に小・中学校を通して図画工作・美術を学んだ一般の大学生を対象に、どの程度絵画の基礎的能力・知識が身につけているのかを調べるためのアンケートを行い、その調査結果を基にクロッキーの効果的な指導法を導き出していく。

そこで第3章では、実際に小・中学校を通して図画工作・美術を学んだ一般の大学生を対象に、どの程度絵画の基礎的能力・知識が身につけているのかを調べるためのアンケートを行い、その調査結果を基にクロッキーの効果的な指導法を導き出していく。

Ⅲ. アンケートの分析に基づく授業計画と実践

1. 事前アンケート

本節では、授業実践を行う学生の実態を調査し、そこから指導法を考察するために、クロッキーに関する事前アンケートを二つの講座で行った。

対象となったのは、美術分野を専門としていない大学生で、一年生から四年生までの124名である。アンケートの内容は、これまでのクロッキーの経験や知識、絵画への興味について問うもので、質問は全部で5問用意した。項目は下に記したものである。

質問1

- ・クロッキーという言葉を知っていましたか。
- ・「はい」と答えた人はどこで知りましたか。
- ・クロッキーについて知っていることを書いてください。

質問2

- ・クロッキーを今までにしたことがありますか。
- ・「はい」と答えた人はいつしましたか。
- ・どのような授業内容でしたか。

質問3

- ・絵を描くことは好きですか。
- ・その理由は何ですか。
- ・「好き」「どちらかといえば好き」「普通」と答えた人に、人物を描くことは好きですか。
- ・その理由は何ですか。

質問4

- ・絵を描くときに気をつけていることはありますか。

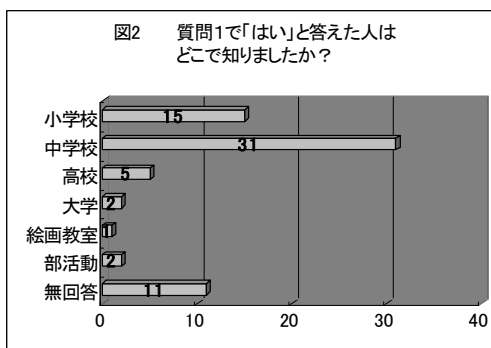
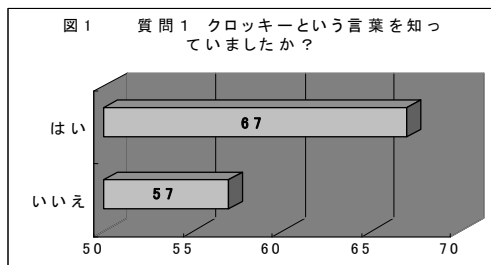
質問5

- ・好きな画家と作品を書いてください。

質問に対して以下のような結果が得られた。

(1) 質問1の結果と考察

質問1の結果から、大半の学生は今回の授業の前段階で、クロッキーという言葉を目にしているようである。美術を専門としていないが想像していたよりも認識度は高かった。(図1)



質問1についてどこで知ったかという問では、小学校・中学校の義務教育中で知った学生が大半を占めており、(図2) 授業やそれ以外の時間を使ってクロッキーを経験しているため、認識度が高いようである。

図の結果のように、クロッキーという言葉を知る学生が多く、特に小学校・中学校に集中したのは、クロッキーが表現の基礎的な部分として位置づけられているから、小学校や中学校で扱われることが多いのだと考えられる。

具体的に知識を把握するため、クロッキーについて知っている事を書いてもらった。(表2)

表2 クロッキーについて知っている事を書いてください

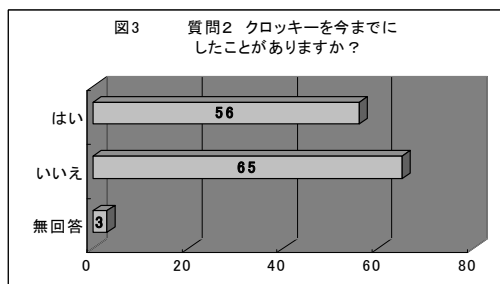
(5分くらいの)短時間で描くもの	14名
鉛筆や木炭などで描くもの	12名
言葉だけ知っている	7名
影を描かずに(輪郭)線で描くもの	5名
スケッチや下絵のようなもの	5名
消さないで描くもの	4名
形を捉えて対象を把握するもの	4名
その他(模写のようなもの・写實的に描くもの・白黒で描くもの等)	6名

ここでは、時間についての答えが一番多く、次

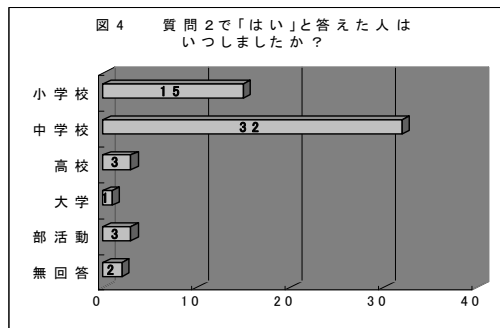
にクロッキーの画材について答えるものが多かった。逆に「線で描く」「消さないで描く」という描き方についての意見は予想よりも少ないことが目にとまった。具体的に時間や画材、描き方を答えた学生は、これまでにクロッキーを経験したことが知識として定着している結果と考えられる。

(2) 質問2の結果と考察

次に、これまでのクロッキーの経験について尋ねたところ、経験していない学生が半数を超える結果となった。(図3)



質問2に関連して、いつ頃クロッキーを経験したかを質問した。(図4)



すると、中学校が一番多く、次に小学校と続き、ほぼ大多数の学生が中学校までにクロッキーを体験していることが明らかになった。

特に、小学校では朝の活動や、図工の授業の始まりにクロッキーの時間が設けられていた、と答えている者もいた。また、クロッキーは授業のようにまとまった時間を確保しなくても、短時間で描けるだけでなく、身近にある材料で、気軽に経験させられる教材で、かつ子供にも容易に描けるため授業外で取り組まれているようである。

逆に中学校、特に高校になると、授業外でのクロッキーの時間はほとんど設けられておらず、美

術に当てる授業時数が少ないことに加え、クロッキーなどの身近な美術に触れる機会が少ないようである。

具体的に経験した事を明らかにするため、これまでのクロッキーの授業内容を質問した。(表3)

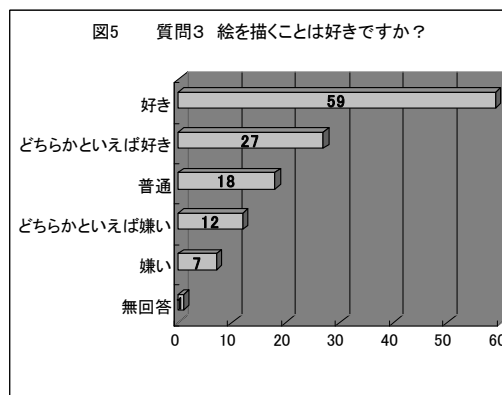
表3 これまでのクロッキーの授業内容を書いてください

人物の体や顔を描く	26名
手を描く	12名
1～10分で描く	9名
毎週のクロッキーの時間で描く	9名
その他（風景や静物を描く・教科書の模写・動くモチーフを描く等）	15名

ほとんどの学生が、普段使っている道具やいつも見ている自分の顔や手、風景など、生徒の身近にあるものをモチーフに描いている傾向がある。これは、学生にとって興味の対象になりやすいもので、その分気持ちも込めやすく、描く意欲に繋がるため、学生の表現の題材としてよく用いられるのではないかと思う。

(3) 質問3の結果と考察

質問3では、絵を描くことへの興味について尋ねている(図5)。



「好き」、「どちらかといえば好き」、「普通」は104名と全体の約83%、「どちらかといえば嫌い」、「嫌い」と答えたのは19名と全体の約15%を占めていた。この結果から、絵を描くことに対して興味がある学生は非常に多いことが分かった。

次にその理由は何か、という問では、具体的に

次のような理由が挙げられた。(表4)

表4 質問3での答えを選んだ理由を書いた
さい

I. 好き	
楽しいから	23名
描くこと・作ることが好きだから	5名
ストレス解消になるから	3名
その他(画家の目線がわかる等)	6名
II. どちらかというが好き	
楽しいから	5名
描くことが好きだから	3名
うまく描けると嬉しいから	3名
その他(自由に描ける・集中できる・完成が嬉しい等)	8名
III. 普通	
見たまま正確に・うまく描けないから	14名
得意でもなく苦痛でもないから	4名
人に見せたくないから	2名
その他(センスがないが面白い・自由に描ける等)	4名
IV. どちらかという嫌い	
うまく描けないから	9名
その他(意欲が湧かない等)	4名
V. 嫌い	
うまく描けないから	10名
よく見ているのに描けないから	1名
人と比べられるのが嫌だから	1名

「好き」・「どちらかといえば好き」では、制作中に感じる喜びや充実感を感じる事が、好きな理由と直接的につながっているようである。逆に「どちらかといえば嫌い」・「嫌い」の理由として多かったのは、「うまく描けない」「リアルに描けない」というものだった。

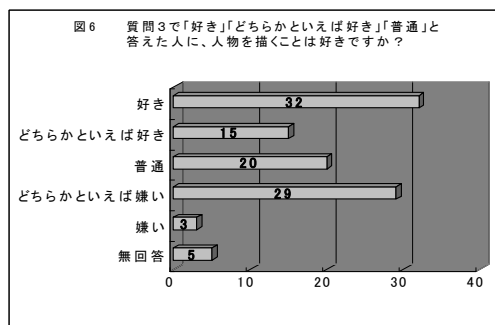
ここから、表現する技術が追いついていないことを感じ、イメージや表現したい想いと技術とのギャップに苦しんでいる学生が多いようである。

また、絵画を嫌う理由の中には「人に見られることや、比べられるのが嫌だから」というものがあった。授業中に、参考資料として生徒の作品を提示する場面や、表現の評価の中で作品を鑑賞し、批評しあう場面がある。教師の評価の言葉かけや友人からの言葉が適切でない、人前に作品

を示すということに抵抗を感じ、人前に作品を示すことが嫌になってしまうということも考えられる。

また、他の要因として、絵画に対する「いい絵＝うまい絵」という偏った見方をしていることである。そのために、再現することのみ絵画には価値があり、少しでもリアルに再現できていないと、それだけで価値が無いと思ひ込み、そこから絵画を嫌いになってしまうのではと推測される。

次に質問3で「絵を描くことが好き」「どちらかといえば好き」「普通」と答えた104名に対して、人物を描くことは好きかという質問をした。



すると、質問3に比べて「どちらかといえば嫌い」「嫌い」と答える学生が増加した。(図6)

これは、モチーフによって苦手意識があり、意欲や気持ちが変化することを示している。

その理由は何か、という問では、次のような意見が挙げられた。(表5)

表5 人物を描くことについての答えを選んだ理由を書いてください

I. 好き	
楽しいから	7名
表情が面白いから	5名
動きがあるから	4名
その他(色々な形が描ける・違いを発見できる等)	5名
II. どちらかというが好き	
大変だが達成感があるから	3名
発見があるから面白い	2名
特徴を捉えることが楽しいから	2名
その他(対象に興味を持てる・人を描くのは苦手・画力が無い等)	5名

Ⅲ. 普通	
特徴を捉えると楽しいから	2名
細部にこだわってしまうから	2名
描き方が分からないから	1名
難しそうだから	1名
その他(あまり描いた事がない等)	7名
Ⅳ. どちらかという嫌い	
物よりも細かくて難しいから	8名
リアルに、うまく描けないから	7名
バランスがとりにくいから	5名
顔を描くのが難しいから	2名
その他(特徴がありすぎる・動くので難しい・苦手意識がある等)	10名
Ⅴ. 嫌い	
バランスがとりづらいから	5名
下手なので苦手意識があるから	2名
その他(立体的に描けない等)	2名

人物を描くことは、人が細かいパーツや色々な形が組み合わさった複雑な構造をしているために、それだけで「描くのが難しい」「形が捉えられないから苦手」だと感じる学生が多い。

また、顔などモチーフの特徴が一番顕著に出てくる部分に意識が集中して全体のバランスが崩れ、うまく特徴を掴めずに、リアルに再現できないため苦手意識を持つ学生もいるようだった。

(4) 質問4の結果と考察

質問4では絵を描くときに気をつけることは何かを尋ね、次のような結果になった。(表6)

表6 絵を描くときに気をつけることは何ですか

よく見る・観察する・見比べる	24名
バランス	21名
全体を見て大きな形を捉える	10名
楽しく・思うように描く	8名
印象・雰囲気・特徴を掴む	8名
構図・配置	7名
できるだけ忠実に描く	7名
その他(大きさ・細かく描く・光・立体感・配色・比率・角度・遠近感・テーマを決めて描く等)	39名

(5) 質問5の結果と考察

質問5では好きな作家を尋ね、下のような結果

が得られた。

- ・ラム＝シメール ・ラッセン ・エッシャー
- ・ミュシャ ・モネ ・ゴッホ
- ・レンブラント ・ダヴィンチ・ミレイ
- ・フェルメール ・ムンク ・ラファエロ
- ・ボッティチェリ ・ミレー ・ピカソ
- ・ウォーホル ・モディリアーニ
- ・ビゴー ・奈良美智 ・佐伯祐三
- ・安井曾太郎 ・横山大観 ・雪舟
- ・山口晃 ・松井冬子

これらのアンケート結果から、学生の実態が見えてきた。

まず、絵を描くことへの関心は非常に高いと言えた。その理由としては、自分の表現に集中し、没頭できているために結果、他人の目や評価を気にすることなく純粋に表現を楽しむことができていようである。

しかし、絵画を「嫌い」と答える学生もおり、その理由から、「嫌い」と答える学生ほど評価や他人の目を気にしすぎる傾向が強いようである。また、自分の中で「こう描かなければならない」という意識に囚われているようであった。質問3で絵を描くことと、人物を描くことが嫌いという理由のいずれにも「リアルに描けないから嫌い」「見たままに描けないから嫌い」という意見があったことから明らかである。それにより、難しく考えてしまい、表現をのびのびと楽しむことができていないと考えられる。

「嫌い」だという学生に対しては、人によって違い、幅広いものだとすることを理解させ、何よりも表現そのものに喜びを感じさせることが大切である。そのためには、「描き方が分からない」「よく見ているのに描けない」という意見が挙げられたところからも、基本的な描き方やものの見方を第一に指導していく必要がある。

次に、絵を描くことでも、モチーフによって、苦手意識があったり、逆に表現の意欲につながったりすることが分かった。そのモチーフだからこそ描ける部分を魅力の一つと捉え、そこが興味深いと感じる学生も多いようであった。また、苦手

なモチーフでも、描いていくうちに発見があり、うまく描けなくても絵に対して愛着が湧くという学生もいた。

更に、クロッキーについては、言葉への認識度は54%、また45%の生徒は経験していることが分かった。それは、小・中の授業で扱われることが最も多く、それ以外の活動時間でも取り組まれているという実態が明らかになった。

逆に言葉も知らない半数の学生は、授業でも経験していないため、生徒自身が自ら学ぼうとしない限り、表現の基礎とも言えるクロッキーを学ぶ機会はないようである。これにより知識や経験に差があることが見えてきた。

これらのアンケート結果を基に、次節では授業計画を立て、それについて述べていく。

2. アンケートを基にした授業計画

事前アンケート結果を基に、授業での指導法を検討した。

学生の多くは、絵を描くことに十分な興味を持っていた。しかし、苦手と答える学生も、経験が少ない学生もいるため、基本的な描き方を指導することで表現時の戸惑いを減らそうとした。また、うまく描くという固定観念に囚われないよう、のびのびと大きく捉えることなどの見方を中心に指導することとした。

また、活動時間を集中して取り組めるように時間配分を短めに設定した。これは、経験にも差があるため、枚数をなるべく多く描かせることで、描くことに慣れさせることを重点に置いた。また、沢山の作品を振り返らせることで、学んだ事、成長した点を実感できるよう考慮した。

指導内容は、中学校や高校でも応用できるもので、美術を専門としていない学生を対象としていることを考慮した。これは、ごく基本的な知識や技法を全員が習得できることを目的にしたものである。ただ沢山の作品を自由に描かせるのではなく、描き方や見方、技術を見に付けさせることが、表現を楽しみ、つまづきを解決する手立てになると考えられる。

指導法としては、膨大な量の知識を詰め込むのではなく、しっかり理解できるように段階に分け

た指導を行うこととした。また、指導する内容が易しいものから複雑なものへ移行し、学生の活動がスムーズに進むように計画した。

具体的な指導内容は以下の六項目である。

一枚目に入る前の指導

- ・消しゴムは使わない
- ・時間内に描ききる
- ・線だけで描く
- ・頭から足まで・なるべく大きく入れる

二枚目に入る前の指導

- ・構図：大きな塊としてみる。
- ・中心線を意識して描くようにする。
- ・一本の線を長く描く。

三枚目に入る前の指導

- ・参考作品提示
- ・見える範囲のものは描くようにする

⇒シワを描くことで、衣服に隠れている中の動き・太さ・大きさが表現できる

- ・曲線に注意する。直線に近い部分と、曲線の部分との描き分け。

四枚目に入る前の指導

- ・垂直・平行線を頼りに角度を導く。
- ・先入観を捨て、客観的に見ることを心がける。

五、六枚目に入る前の指導

- ・時間が余ったら細部を描き、斜線で陰影をつける。
- ・形が取れるようになったら、筆圧を調節して線の強弱をつける。
- ・鉛筆を長く持つことでストロークの長い線が描けるようになる。

3. アンケート結果を基にした授業実践

事前アンケートの結果と授業計画を基に、美術分野を専門としない大学生(33名)の実習科目において、90分の人物クロッキーの授業を行った。

90分のうち、一枚あたり10分で描き、結果的に六枚のクロッキーを仕上げた。

まず最低限の情報のみを与えた状態で描かせ、それから徐々に指導を加えていった。主な実践の様子は以下に記したものである。

一枚目

- ・大まかな形を描いてから、部分の描写に入る学生がいた。
- ・計って描いている学生もいた。
- ・探り線や、ストロークの短い線を重ねて描いていた。
- ・消しゴムを使う学生もいた。
- ・だいたい頭の方から描き始めるため、描き始めの頭は大きく、下半身が小さくなりがちだった。
- ・構図においても紙の途中から描くため、全身が入りきっていない。
- ・あまりモデルを見ずに、描くことに集中している学生が多い。
- ・顔や髪の毛、指などの細部にこだわって描く。
- ・形のバランスがとれていない。
- ・一枚目を描き終わってから、「早い、時間が足りない、描ききれない」という声が多く聞こえてきた。

二枚目

- ・あたりをつけて、影を頼りに描く、などデッサンのような描き方をしている学生がいた。
- ・一本線でなかなか描けない。
- ・探り線が少なくなった学生もいた。
- ・全身を入れようとするあまり、入れ方が小さくなっていた。
- ・新しく、正しい線を横に描いていた。
- ・難しい、という声が聞こえた。

一、二枚目では、最後まで描ききっていないことが一番目にとまったが、時間の感覚は枚数を描いていくと徐々に掴めてきたようだった。

また、「難しい、描けない」という声がよく聞かれたが、その要因の一つは観察が欠けている事だと思った。学生が制作する様子を見てみると、観察する時間よりも、描く時間の方が長かった。つまり、手があると認識したらモデルを見て描くだけでなく、自分の主観の中にある記憶の中の形を頼りに描いている所が見られた。

線については、一本線で描くようにと指示したところ、一枚目に比べて探り線を何本も引く生徒

が減った。ただ、一本線にはなったが、まだ線自体は短く、躊躇しながら描いているようだった。また、具体的に線の種類を示してもまだデッサンのように中心線やあたりをつける生徒、影を頼りに描いている学生もおり、理解度に差がみられた。

三枚目

- ・足や、床に近い面など、描き始めるポイントが変わった学生がいた。
- ・見る時間が徐々に長くなっていった。
- ・関節ごとに止まって、見てから描く、という描き方をしている学生が見られた。
- ・線が大分長くなってきた。

その後、参考作品を示したからか、一、二枚目で線の描き方を理解できていなかった学生も一本線で描くようになっていた。

また、これまでは体全体を紙に描ききることを一つの到達点としていたようだったが、徐々に人物の骨格や関節の意識などに目を向ける学生が多くなった。そして関節で筆を止めて描き、服の硬さと、対照的な肌の柔らかさを筆圧の強弱を用いて表現しようと試す学生も見られた。

四枚目

- ・描き始めの位置が紙の上部に上がってきた。位置も左右のバランスが取れてきた。
- ・逆に、地面や、中心の胴体部分から描く学生も見られた。
- ・細部になると、探り線が見られた。

五・六枚目

- ・髪の毛などは、筆圧を緩めて細く描くなど、質感によって描き分けをしようとしていた。
- ・大分形も取れて、構図もバランスよく入るようになってきた。
- ・時間の感覚も慣れ、細部の描きこみにも手が回る学生が増えてきた。
- ・クロッキー帖をイーゼルに立たせるように持ち、対象との距離を近く、より観察しようという気持ちがうかがえた。

・探り線自体も大分消え、ストロークも長くなってきた。

授業実践を振り返って、学生の理解や気付きの段階に応じて、指導を加えることは、混乱せず理解しやすいので効果的だった。

反省点として、鉛筆の持ち方など基本的な事は、一、二枚目の段階から指導を行っている、もっと早い段階で長いストロークで描ける事を学生自身が気づくきっかけになったのではと推測できる。

また、枚数をこなす内に自然と改善はされたが、対照をじっくりと見ていないためにモチーフを把握できず描けないと感じる学生に対しては、顔を上げて対象を観察する事が重要だと声かけをする必要があった。

線の種類を学生に把握させる際に、理解度に多少差が出ていたため、一度の説明だけでなく、何度も声かけを行い、資料の提示を行うなどの指導を行った。言葉だけで支持するのは全員の理解を得るには難しいが、視覚的な情報として示すと、皆理解しているようだった。よって、学生の状況や理解度に気を配り、それに応じて指導を繰り返したり、順序を変更したりすると共に、口頭以外にも資料を提示するなどの対応が効果的であったと言える。

IV. おわりに

本研究ではクロッキー教育の意義と指導法について研究し、ひとつの授業実践をもとに研究の確認を行った。短時間で行えるクロッキーは、中学校、高等学校の短時間の授業においては有効的であると思われる。また、特に人物クロッキーの場合は、時間的拘束が強くなる分緊張感も増し、集中して制作に取り掛かることができるということが再確認できた。

今回はひとつの講座での授業実践を行ったが、今後は実践を深めてより効果的なクロッキーの指導法を導き出していきたい。

引用文献

- (1) 新村出/編、「広辞苑 第六版」、岩波書店、2008年(第六版)、p. 842
- (2) 佐藤亮一/発行、「新潮 世界美術辞典」、新潮社、1985年、p. 454
- (3) 西丸武人、「クロッキー教室」、美術出版社、1980年、p. 28
- (4) 日本児童美術研究会、「新版 日本の図画工作 3・4上」、日本文教出版株式会社、pp. 10-11
- (5) 日本児童美術研究会、「新版 日本の図画工作 5・6下」、日本文教出版株式会社、pp. 16-17
- (6) 花篤實ほか、「新版 日本の美術 1」、日本文教出版株式会社、pp. 10-11